

18 脊髄損傷者の麻痺域の下肢骨折に対する危険因子

看護部 外来・健康管理室 鏡味麻里子

【目的】

脊髄損傷の合併症の一つに麻痺域である下肢の骨萎縮と骨折があるが、骨の健康教育の介入に関する実態は明らかではない。そこで、脊髄損傷者の麻痺域の下肢骨折の発生状況、下肢骨折と関連のある因子を探り、予防介入の示唆を得ることとした。

【方法】

平成26年8月17日～9月30日に、全国頸髄損傷連絡会の全会員（521名）を対象とし、郵送による無記名自記式質問紙調査を行った。筆記での記入が不可能な場合には、希望により調査票の電子データ版を電子メールで送付した。回収は①送付した調査票の返送、②電子データ版のいずれかとした。調査票とともに、研究協力は任意であり個人が特定されることはないことなどを文書で説明し、調査票の返送をもって同意を得たものとした。調査票は、先行研究をもとに内容を検討し、さらに、脊髄損傷者の看護に5年以上携わり、かつ、下肢骨折の看護の経験のある看護師4名の意見をもとに作成した。調査内容は、基本属性・脊髄損傷受傷部位・脊髄損傷受傷時年齢・飲酒と喫煙の有無・麻痺域下肢骨折の有無・下肢骨折者には骨折原因・生活動作の支障の有無とした。分析には、統計解析ソフトSPSS Version22を用いた。本研究は、筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

有効回答は224名（43.0%）で、男性191名（85.3%）、女性33名（14.7%）であった。損傷部位は頸髄213名（95.1%）が最も多かった。回答者224名のうち、麻痺域の下肢骨折の経験者は46名（20.5%）であった。下肢骨折時の平均年齢は、男性39.6歳、女性41.8歳で、下肢骨折までの障害年数は男性16.2年（最少1年、最大51年）、女性13.0年（最少1年、最大25年）であった。「喫煙の有無」「飲酒の有無」「性別」「脊髄損傷受傷20歳前後」の4変数と「下肢骨折の有無」で χ^2 独立性の検定を行った結果、「喫煙の有無（ $p=.059$ ）」と「脊髄損傷受傷20歳前後（ $p=.004$ ）」が $p<.1$ であった。この2変数を独立変数、「下肢骨折の有無」を従属変数としてロジスティック回帰分析を行った結果、「脊髄損傷受傷19歳以前（ $p=.005$ 、調整オッズ比2.652、95%CI[1.336, 5.262]）」が $p<.05$ で有意であった。

【考察】

脊髄損傷者の麻痺域の下肢骨折時の平均年齢は男女とも約40歳で、健康増進法に基づく骨粗鬆症検診は40歳以上の女性が対象のため、脊髄損傷者では麻痺域の骨萎縮による骨折を予防するためには、一般的な骨粗鬆症対策と区別して予防について検討する必要がある。脊髄損傷者の下肢骨折を予測する危険因子が「脊髄損傷受傷19歳以前」であることについては、一般的に、20歳前後で最大骨量に達するとされており、脊髄損傷受傷19歳以前ではこれに達しないため、下肢骨折を予測する因子となったと考えられる。よって、19歳以前に脊髄損傷を受傷したものには、骨の健康教育や骨粗鬆症の検診が推奨される。